

小-38

小型犬における頸部脊椎脊髄症の術式選択に関する考察

○松本 創¹⁾ 越後良介¹⁾ 華園 究¹⁾ 石塚友人¹⁾ 伊丹貴晴¹⁾ 奥村正裕²⁾

1) 北大附属動物病院 2) 北大獣医外科学

【はじめに】頸部脊椎脊髄症（CSM）は脊柱管の狭窄により頸髄が圧迫を受けることで発症する慢性進行性の脊髄疾患であり、大型犬での治療法や予後については多数の報告が存在する。一方で、本邦においては小型犬でのCSMの発生が広く知られているが、その治療選択に関する基準はほとんどない。今回我々はCSMの病態を強く意識して複数の手術法で本症に対する治療を行った結果、若干の知見を得たため、報告する。

【症例】歩様検査、神経学的検査、各種画像診断においてCSMと診断され、外科的治療を行った小型犬7頭を対象とした。犬種はヨークシャー・テリア、チワワが各2症例、ミニチュア・ピンシャー、ポメラニアン、ウィペットが各1症例であった。平均年齢は10.4歳、平均体重は4.8kgであった。単純X線検査にて、5症例で変形性脊椎症が認められた。全症例でMRI検査を実施し、4症例で脊髄造影検査を追加で実施した。腹側からの脊髄圧迫は全症例で認められ、背側からの脊髄圧迫は4症例で認められた。また、動的病変が確認されたのは2症例であった。

【治療法および予後】動的病変が認められた2症例と明らかな主病変が1カ所のみで認められた1症例においては、ベントラルスロット形成術と椎体固定を併用した。腹側と背側からの圧迫病変が多発性に認められた4症例では、頸椎の連続背側椎弓切除を実施した。外科的治療を実施した7症例中6症例で臨床徴候の改善が認められた。

【考察】頸椎腹側領域の手術では術後にその領域の不安定性が増すことから、小型犬においてもCSMの病態の認識と各病態に合わせた術式の選択が重要である。明瞭な主病変が1カ所、かつ動的不安定が示唆される症例にはベントラルスロット形成術による圧迫物質の直接的な除去と椎体固定による頸椎の安定化が小型犬においても有効と考えられた。また、連続背側椎弓切除は大きな減圧窓を作製することで間接的に腹側からの脊髄圧迫を緩和し、同時に背側からの脊髄圧迫を直接的に除去することが可能であった。広範囲に減圧を行うことで今後の臨床徴候の予防も可能であり、この手技は関節突起を温存するため頸椎の安定性の低下には寄与しないことから、多発性病変を有するCSMの症例には有効な術式であると考えられた。今後は、各手技における長期的な予後の追跡とさらなる症例の蓄積を重ねる必要がある。